

批判的実在論の方法論

— アブダクションを用いた構造的説明 —

伊 賀 光 屋

I 構造からの現象の説明

(1) リアリティの三つの領域

社会科学における説明には法則による説明とメカニズム(構造)による説明とがある(伊賀光屋, 2012)。法則による説明では経験論に基づく実証主義(水で薄めた実証主義watered-down version of positivism)がその背後に存在する。これは、経験論者の存在論と実証主義者の認識論のあまり厳格でない雑種といわれている。ここでは、諸出来事の間に恒常的な同時発生(規則性)が存在することを突き止め、そこから一方の出来事が他方の出来事の発生を決定づけていると考える。この恒常的規則性についての「カバー法則」タイプの普遍的陳述によって経験が一般化され、科学が展開するとされる。この経験論では、これらの諸出来事を決定している実在的な構造の存在などは想定されない。ただ単に、諸出来事間に観察された同時発生的あるいは統一的規則性から、原因と結果の連鎖が推定されるだけである。ここで用いられる推論は演繹法と帰納法である。

ポスト実証主義の思潮のなかで、この経験論の実証主義は一方で科学的実在論によって、他方で構築主義によって批判されている。しかし、科学的実在論と一括りにされる潮流の中には大きくって理論的実在論(P.Hedstrom, R.Collinsら)の立場と批判的実在論(R.Bhaskar, M.Archer, G.Steinmetz, A.Collier, A.Sayerら)の立場がある。また、構築主義の陣営とされる潮流の中には、カルチュラリズムと約束主義といった相容れない立場も含まれることが多い(A.Sokal,1996)。

しかし、本稿ではそれらの間の諸論争には触れずに、もっぱら批判的実在論の構造による説明の特徴とその射程と限界について論じたい。

批判的実在論はリフレクシブな実在論とも呼ばれ、社会的メカニズム・社会構造が構成されるときに知識が関与していることを強調し、また説明を普遍的なメカニズムによらず歴史化されたメカニズムから説明する実在論の立場である。その理論的特徴は次の三つの主張をする点にある。

- ① 世界は自存的(intransitive)なりアリティと意存的(transitive)なりアリティとに分かれる。
- ② 前科学的あるいはイデオロギー的な人々の観念は実践の中のアブダクションとリトロダクションによって科学的な理論に変換される。
- ③ 社会の根底に潜む構造を捉えた理論は、社会の中で流布している意的な様々な言説と異なり、自存的な実在を真正に捉えている。

このように、批判的実在論では、実在と現象を峻別する。そしてリアリティは次の三つのレベルに分かれ、図1のような包含関係にある。

従来の法則定立的理論の立場の議論では、帰納は限られた数の感覚的観察から一般的な規則性あるいは普遍的法則を導き出す推論であり、妥当な科学的知識を産むことはできないとされてきたが、批判的実在論者の方法論の議論(M.Archer,1998; B.Danermark,2002; A.Sayer,1984)でも、それは社会的リアリティについ

て妥当な普遍的議論を引き出すのに十分ではないとする。

また、演繹は法則定立的理論の立場からは妥当な科学的知識を生み出す推論形式と考えられてきたが、批判的实在論では経験的リアリティの中にそもそも一般的規則性や普遍的法則性を探し求めることは無駄であるとされる。批判的实在論では、帰納や演繹という推論形式は二義的な意味しかもたない。

そして、帰納や演繹に頼る経験的アプローチや解釈的アプローチは社会的リアリティが単一の層からなると考えていて、経験論では社会的リアリティは観察されたものの全てであり、解釈学では象徴的に表現された意味の全てであるとされる。しかし、社会的リアリティは図1のように三つの層、すなわち経験的リアリティ（経験から構成される）、現実的リアリティ（出来事から構成される）、実在的リアリティ（メカニズムから構成される）からなっているという。

そして、社会現象を科学的に説明するということは、実際に生じている様々な出来事を生み出し、翻って多少なりとも感覚を通じて経験される、基底のリアリティの中に存在する時空的に特殊な諸メカニズムを明らかにすることであり、そのための思考操作法としてアブダクションやリトロダクションが必要だというのだ。

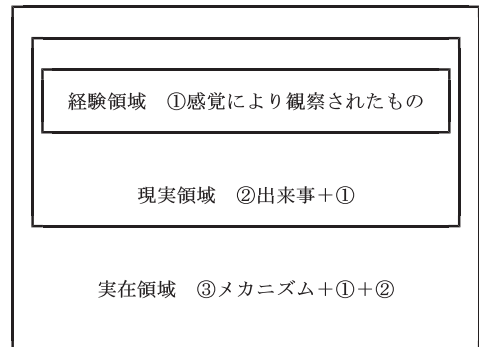


図1. リアリティの三つのレベル

(2) 二つの説明様式

社会研究が科学であるためには、説明と一般化の二つの要件を満たさなければならない。しかし、経験論と批判的实在論とは一般性について異なった見解をもっている。経験主義で言う一般性とは認識領域での一般性のことである。経験論では観察し得ない実体というのは存在しないから、限られた数の事実に関する観察結果から、より多い数の母集団について普遍的に適用しうる結論を導き出すことができれば一般化が達成されたことになる。言い換えるとある経験的現象・出来事が一般的に起こりうることを明らかにすることが一般化である。そのために経験的外挿法が用いられる。そして、形式的な属性を共有する個々の諸現象からなる母集団についての普遍概念、すなわち経験的カテゴリー、例えば女性、高齢者、低所得者などについて一般的な陳述が為される。そして、説明とは諸現象・出来事の間に恒常的な同時発生・続発が存在することが確かめられ、ある現象・出来事がそうした規則性・法則の発現したものとして叙述することである。個別的なものから一般的なものを引き出すために、経験論では帰納および演繹といった推論形式を用いる。

これに対して批判的实在論では一般性とは存在領域での一般性のことである。ある対象がそのようなものとして存在する為の普遍的な必要条件、その対象の隠された本質が一般性である。だから一般化とは本質が同じである諸現象の範囲を述べることに他ならない。いいかえると、具体的で表層的なものから基底的で深層にある構成要素、構造、そしてメカニズムなど、表層的な現象を生み出す一般的な仕組みを抽出し分離することが一般化である。そのためにretroduction（遡源的推論）が用いられる。そして、個々の現象の背後に共通して存在する構造やメカニズムについての普遍概念、すなわち抽象概念、例えば疎外、支配、社会統合、イデオロギーなどによって一般化の陳述が為される。そして、説明とはある現象・出来事を生み出す因果的メカニズム（構造）を発見し、その現象・出来事がそのメカニズムの特殊な条件下で発現したものであることを叙述することである。

「超越論的实在論にとって、説明とは未だに知られていない現象の生産様式についての真に社会的に生み出され、可謬的な因果的解説であるか、こうした解説を備えたエピソードである。理論科学では、説明はそれまでに知られていない生成メカニズムについての解説によって成し遂げられる。また実践科学（応用的で具体的な科学）では、既に知られている諸メカニズムをある特殊な状況下で結合して未だに知られていない諸メカニズムの連結様式についての解説によって成し遂げられる。」（R.Bhaskar, 1986: 60）

そして、個別的なものから一般的なものを引き出すために、批判的实在論ではアブダクションやリトロダクションといった思考操作法を用いる。

II アブダクションとリトロダクション

(1) リトロダクション、アブダクションの語源的意味

P.Chiasson (2005) によるとretroductionの‘retro’は(go backward:戻る, 遡る)という意味があるラテン語由来の接頭辞で、また同じくラテン語由来の接尾辞‘ductive’ (ducere:導く)と結合して「もとに戻る」という意味がある。‘retro’にはさらにdeliberateness (故意に)の意味があるとして、リトロダクションとは「アブダクション、演繹、帰納の推論形式を駆使して、故意に繰り返し分析し直し、打ち立てた仮説を微修正しながら、広く検証しうる価値ある仮説へと練り上げるプロセス」を指していると論じる。つまり、リトロダクションは驚くべき事実を発見し、その原因を推測し、思索するという、仮説を生み出すプロセスであり、そこでは演繹、帰納、そしてアブダクションの三つの推論形式が併用される、論証(argument)というのだ。つまり、リトロダクションはアブダクション、演繹、帰納を含むそれらの上位概念ということになる。

abductionの‘ab’は(away from:から離れる)という意味があるラテン語由来の接頭辞で、また同じくラテン語由来の接尾辞‘ductive’ (ducere:導く)と結合して「中心から遠ざかる動きをもたらす、あるいはそれる」という意味があるという。そこから、アブダクションとは、異常な驚くべき事実遭遇したときに慣れ親しんだ考え方や話題からそれて、それらを創造的に表現し直すことに表すのに適した言葉であるという。つまり、個々の事実を広く流布しているその説明原理から離れて、新たな創造的仮説によって説明する推論法だということだ。

同じように、‘de’は分離、除去、否定を意味する接頭辞であることから、deductionは一般原理から分離して個々の事実(結論)を推論することの意味となり、‘in’は含める、入れるを意味する接頭辞であるから、inductionは既知の事実・証拠から一般原理を推論するという意味となるという。

(2) パースのアブダクション

C.S.Peirceは推論が分析的なものと総合的なものに分けることができ、前者には演繹が、後者には帰納と仮説(アブダクション)が含まれると考えている。

そして、C.S.Peirceはアブダクションとリトロダクションそして仮説を互換的に用いているが、それらは二つの異なる意味で用いられている。一つの用法は演繹や帰納とおなじ形式的推論による立証(argumentation)の一種を指す時に用いられる。例えば、

ルール：この袋から取り出した全ての豆は白い。

ケース：これらの豆はこの袋から取り出した。

結果：これらの豆は白い。

という、三つの陳述があったとする。演繹はルールとケースを前提として結果を結論として導き出す推論である。この場合ルールが正しく、個々のケースが観察されると、結果は論理的に導き出される。結果はルールの中で既に知られていて、結論は何ら新しい知識たり得ない。帰納はケースと結果を前提としてルールを結論として導き出す論法である。帰納では全てのケースが観察されるわけではないので、結論としてのルールは蓋然的なルールたらざるを得ない。それに対して、アブダクションはルールと結果を前提としてケースを導き出す推論である。すなわち、アブダクションとは

驚くべき事実Cが観察された。

しかし、もしAが正しいなら、当然Cが生じるだろう。

だから、Aが正しいと考える理由がある。

という推論である。そして、このアブダクションではルールが正しく、結果が観察されても、結論としてのケースが論理必然的に導き出されない。つまりそれはもっともらしいが正しいとも正しくないとも言えない。しかし、何らかの方法でそれが正しいと証明されれば、この結論は新しい知識であると言える(Peirce,1878)。

今ひとつのアブダクションの用法は立証(argumentation: 定式化された諸前提から展開される論証)としての今述べたアブダクションや演繹そして帰納を駆使して、仮説を練り上げる自由の(拘束のない)法則以外に何のルールにも従う必要のない沈思のプロセスという意味で用いられる場合である。

C.S.Peirceは直接観察しえないもの(パースの場合にはGod)の实在性を論証するための方法として従来「なおざりにされてきた論証法」(neglected argument)である、遡及推理(retroduction)に着目した。

彼は経験が①観念、②現実性(出来事など)、そして③宇宙における対象間の結びつきを確立する能動的能力に根ざすもの(記号、生きた意識など)という三つの宇宙からなると考えた。そして、直接観察しえぬものの实在性の仮説に基づいて、この三つの宇宙について思索を深める探求は遡源推理、演繹、そして帰納の三段階を経て進められるとする。

まず、探求は驚くべき事実に気づくことに始まり、探求の第一段階の遡源推理により仮説が推定される。ここで遡源推理の内容としては次のことが触れられている。

「適切な状況の探求、それらの状況の、ときにはそれと認知していないこともある把握、そしてそれらの状況の綿密な吟味、暗闇での骨の折れる作業、はっとするような推量の突然の展開、錠前にさしこんだ鍵のように何回か廻して調節し、それが当の例外的事象に無理なく適合するということの確認、そしてそれのもっともらしさについての最終的な評定等々」(Peirce,1908:441, 訳書155頁)

この遡源推理は、後件から前件への推理という形式的には誤った論理によって行われていて「探求者は当の説明された驚きがまさしくなんであるか決定的に定式化することはできないし、あるいは定式化できるにしても仮説に照らして定式化しうるに過ぎない」。

このように遡源推理は立証(argumentation)ではなく論証(argument)にすぎないとされる。そこで、探求の第二段階としての演繹(deduction)が行われる。演繹には二つの段階がある。その第一の段階は論理的分析によって仮説を詳述する(explicate)ことであり、仮説を可能な限り明確にする論証である。ついで第二の段階では証明(demonstration)と呼ばれる演繹の立証が行われる。こうして、遡源推理によって立てられた仮説が、どのような論理的帰結をもたらすのかについて定式化がなされる。

探求の第三段階では、演繹によって論理的に導き出され定式化された仮説の諸帰結が、どの程度経験と一致するのかを確かめ、その仮説がどの程度正しいかを判断する。ここでは帰納法が用いられ、経験された対象に観念を割り当てる分類と、仮説を検証する検定と、仮説の真偽の判定がなされる。

このように、アブダクションは演繹や帰納に並ぶargumentationであると同時に、それらを包摂し、それらを十全に機能させるための論証(argument: 合理的に一つの確定的な信念を生み出す傾向のある思惟過程)でもある。そこで、P.Chiasson(2005)は狭義のargumentationとしてのアブダクションにはabductionを、広義のargumentとしてのアブダクションにはretroductionを当てて、パースの諸論文を読み直すべきだとしている。

(3) 徴候学のリトロダクション

徴候学(semiography)とはC.Ginzburg(1986)がモレツリ、シャーロック・ホームズ、フロイトらの方法として述べた、個別の出来事の流れを徴候(観察される行動、出来事、及びそれらの痕跡)とシナリオ(人々がよく用いてきた出来事のつながりについての筋立て)から個別の出来事の流れを推測するパラダイム(un paradigma indiziario)のことである。

「何千年もの間、人間は猟師であった。数限りない追跡を繰り返すなかで、彼は姿の見えない獲物の姿勢と動きを泥土に残された足跡、折れた木の枝、ふんの玉、一房の頭の毛、引っかかって落ちた羽根、消えずに漂っている匂

いなどから復元するすべを学び取ってきた。よだれの線条のようなごく微小な痕跡を嗅ぎとり、記憶にとどめ、解釈し、分類するすべを学び取ってきた。密林の奥や落とし穴だらけの林間の草地にあって、複雑な知的操作を瞬時に成し遂げるすべを学び取ってきたのであった。・・・この知を特色づけているものは、一見したところ何の意味もないように見える実地の経験に基づくデータから直接には経験しえないあるひとつの総体的な現実にまで遡ってゆける能力である。そして、これにいま一つ特色として付け加えることができるのは、これらのデータはつねに観察者によってひと続きの物語を生み出すような仕方では配列されるものであるということであって、その最も単純な形式は〈なにものがあそこを通り過ぎた〉というものであろう。（おそらく、魔法をかけたり悪魔ばらいをしたり神の加護を求めたりするための祈祷とは区別された）物語という観念自体、獵師たちの社会の中で、痕跡の解読の体験を通じて、はじめて、生まれたのであった。獵師こそは〈歴史を物語る〉ことをした最初者であったに相違ないのである。というのも、ひとり彼のみが獲物の残した物言わぬ痕跡の中にひと続きの一貫した出来事の流れを読むことができたからである。」（訳書189～190頁。下線部は筆者がつけている）

このように狩人の推論に喩えられたリトロダクションを実行する人間の物語能力の発揮は、演繹や帰納といった形式論理的推理よりも日常生活の中で人々が頻繁に行っている推理である。そしてその多くが「過剰に記号化されたリトロダクション」にすぎないが、歴史家や社会学者は、サバトに集う魔女たちの豊穣信仰や巫女のトランス状態での口寄せあるいは狼憑きの悪魔との戦いなどの背後にユーラシア大陸に遍在するシャーマニズムの「死者の世界の物語」を読み取ったギンズブルグが用いたような、「創造的リトロダクション」を用いなければならない。

(4) ラディカル構成主義者のアブダクション

大脳皮質の神経細胞は周囲の細胞外液とカリウムイオン、ナトリウムイオン、塩化物イオンなどのイオン構成が異なっていて、細胞内は -60mV ～ -70mV の負の電位がある。このため、方向選択的反応が現れる自発的な発火活動を絶えず行っている。そして発火活動には特定のパターンを繰り返す周期性があり、その中のあるパターンが外部刺激と結びつくと記憶が生じると言われる。また、方向選択制には弱い外部刺激に対してノイズを加算して反応性を高めるいわゆる確率共振がみられる（池谷祐二, 2005）。このように、脳には外的世界によって決定されず内的ルールに従って、感覚器官に到達した刺激を解読し、それらの刺激から情報（information）を作り出す作用がある。これは文字通り「内部で作る」（in-formare）作用である。脳はこのように自律的（内因的autonomous）なアブダクションを行う器官であると言える。

カエルの視覚活動やハトの色覚の神経活動などという現象から、その秩序としてのautopoiesisを発見し、それが自律性、個性性、境界の自己決定、入力も出力もないといった特徴をもつシステムであることをH.R.Maturana & F.J.Varela（1980）はアブダクティブに推論した。上述した大脳皮質の神経細胞の働きなどはautopoiesisによって説明できる。

こうした考え方からラディカル構成主義者は、知ることは世界をあるがままに表象することではなく、人間が自身の認知システム内の操作を通じて自身で作り出す作用以外のなにものでもなく、人間の自己言及のプロセスに他ならないという。

「知識は受動的に受容されるのではなく、認知主体によって構築されるものである。認知の機能は、適応的なものであり、存在論的実在を発見するのではなく経験的な世界を組織化するはたらきをもつ。」（von Glasersfeld,E.,1995,訳書,052頁）

「科学者たちはメカニズムの理論的モデルを発明し、実験と呼ばれる繰り返されまた統制された経験の中で、それがモデルとして使えること（viability：実行可能性）を検証する。科学者でない者たちは、経験則（rule of thumb）を集め、それらを生きるという実践の中で応用しようとする。いずれの者たちにとっても、観察者から独立した『リアリティ』の『真』の像をえようとするのが本当の目的ではなく、経験を操作するための道具を与えるのが目的である。」（von Glasersfeld,E.,2001:34）

このように、人間が作り出すモデルや経験則はリアリティの真なる表象ではなく、自らの経験を秩序づけ操作するための道具にすぎないというのだ。

そして、人間が知識を生み出すのに用いる唯一の方法がアブダクションなのだというのだ。「生のデータ」「所与の物」「リアリティ」あるいは認知主体から独立して認知主体が直面している様々な物に二元論者が与えた名称などは、認知的に接近不可能であり、考えること、伝達すること、そして知覚することすら、解釈プロセス、すなわち記号を付与し、意味を割り当てる推論活動であるというのだ。また実体がたとえ存在すると仮定しても、認識はそれから独立して存在するとラディカル構成主義者は主張する。

聞き手による記号（象徴）の理解という行為は、彼の解釈ルールによる意味の限定（帰属）としてしか存在しないという。そして、ある記号に単一の意味を帰属させる認知的操作がアブダクションであるとされる。ここでは、アブダクションは現象（行為）からその現象（行為）の意味（機能）を示すルールを推論し、そのルールに当てはまる一事例としての現象（行為）がある意味（機能）をもつという結論を導き出す操作である。いいかえると、行為、現象などの表に現れていることから、未だに知られていないがその背後にあると思われる意味、意図、動機などを推論することである。アブダクションは論理的には非合理的だが、思考や言語の中に組み込まれたルールに従った実践的には合理的な、そして創造的な思考方法であるというのだ。

「諸経験（あるいはデータ）を整理するには、少なくともそれらの特定の性質に焦点を当てる必要がある。それらの性質の選択範囲は通常極めて広いが、規則性やルールの探求に役立つ選択は常にランダムであると言うことはない。しかし、直観がひらめく場合があるが、成果を上げる科学者と無意味なデータを集める凡人とを区別するのはこの直観である。」（von Glasersfeld, 2001:35-36）

ラディカル構成主義者の主張の核心は、アブダクションが確証されても、それは実在のレベルのリアリティについて何かを語っているのではなく、アブダクションによってえられた仮説的知識（驚くべき現象を生み出す原因として出来事についての知識）が、我々の経験を秩序立てるのに役立っていると言っているだけだという主張である。ラディカル構成主義者は実在世界を記述しようとする形而上学（存在論）を企図しないのだ。

このように存在領域については論じないと彼らは言っているが、資本主義社会の貧困現象の原因が資本・賃労働関係にあるというマルクスの主張は彼や彼に同調する者たちの頭の中にしか無く、実在しないと考えているのであろうか。また、単一の市場に包摂され世界的分業体制にある世界システムの中で諸国家が貿易や資本移動などの点で他の諸国家との結びつきの仕方が違う中核・周辺・半周辺の三つのクラスに分かれているという事態は実在の構造ではなくウォーラステインの頭の中にしかないことと考えているのであろうか。彼らはそれらが実在するか否かに関わらず、資本・賃労働関係や中核・周辺構造というのは、それらの実体と独立して生み出された観念だといっている。しかし、我われが考えなければならないのは認識の内容ではなく、認識が正しかろうが誤っていようが、それとは独立して存在している実体の方である。

(5) 批判的実在論のアブダクションとリトロダクション

批判的実在論は社会関係や構造が人間の知識や実践的活動から影響を受けるという意味で意存的であると言うことは認めるが、こうした人間の認識活動とは全く独立に社会関係や構造は自存的に実在すると考える。そして、批判的実在論では、経験領域で観察されたことから直接観察することはできない自存的に実在する社会関係や構造を推定する思考操作法として、アブダクションやリトロダクションを重視する。

従来、abductionには次の三つの意味があるといわれてきた。

- ① ルール（法則）と結果（現象）からケース（条件）を引き出す推論。
- ② 全ての知覚、リアリティ観察の中心にある論証方法。
- ③ 現象の再記述、再文脈化（再解釈）

①と②はパースがabductionに込めた意味である。③はR.Collinsの「ある観念集合から別の観念集合内の結論に到る推論」（1985：188）やK.B.Jensenの「新しい文脈の枠組みの中であることを観察し、叙述し、解釈し、説明すること」（1995：148）で表現されている意味である。

批判的実在論ではこの③の意味でabductionを用いる。すなわち、abductionはあるものについての従来の概念把握とは異なる、より発展した概念把握への移行であるとされる。つまり、ある現象についての元々の観念を新しい観念集合の枠組みの中に置き直し、解釈し直すことである。この観念集合とはパースの用語ではルールであり、Danermarkらの用語では概念枠組や理論である。これを別の仕方で表現すれば、abductionとは再文脈化（recontextualization）である。既に述べたように‘ab’は「から離れる」という意味があるのでabductionのこの用法は語源の意味に叶っているといえる。また同時にこの‘ab’には研究対象となっている現象の特定の側面を分離する抽象という意味も含まれているといわれる。

こうした意味から、批判的実在論ではabductionは、帰納的にも演繹的にも導き出せない、経験的事実に還元しえず、経験的予測の検証に用いる論証では検証しえない、構造、メカニズム、社会的意味についての知識を組み立てる研究指針という意味で用いられていく。それは超越的な理論や解釈枠組（直接観察し得ない実在領域）と現象（感覚によって観察される経験領域）とを前提として、個々の出来事（事実領域）を推定する推論であるだけでなく、一連の観念あるいは理論の視点から、具体的な出来事を記述し直し、異なる文脈の中に位置づけ直す作業のことだとされる。つまり、abductionでは、理論に基づき事例を記述し直し同時に、個々の事例に基づき理論を修正し洗練するという弁証法的な相互作用が繰り返し行われるというのだ。

また、演繹では論理的推理力が必要とされ、帰納では統計的分析力が必要とされるのに対して、abductionでは想像力や連想力が必要だとされる。証拠がなかったり明白でない諸現象間の関係性や結びつきを識別し、それを新しい観念で表現し、また異なる文脈の中で考えることが出来るようにする想像的な推理力が必要だというのだ。abductionはU.Eco（1984）のいう創造的アブダクションでなければならない。つまり、解釈者の文化的・社会的に根付いた偏見（前提）から為される無意識的解釈である「過剰に記号化されたアブダクション」でも、可能ないくつかの解釈枠組や理論の中の一つを選択して為される「過少に記号化されたアブダクション」でもなく、これまでに誰もが用いなかった、あるいは従来の解釈と対立する解釈枠組によってなされる「創造的アブダクション」こそが、現象の背後に隠されている構造を発見するのに必要なabductionという思考操作法であると批判的実在論では言われる。

retroductionはアブダクションが諸現象（行為や出来事）を再文脈化するときに用いた、一般的構造（内的諸関係）を基本的に特徴づけ構成しているものは何かを推定する思考操作である。経験的に観察可能な出来事や行為といった現象を超えて、それらを生み出しているより根本的で超事実的条件、すなわち実在領域にある、構造やメカニズムの内的関係性を遡源的に、超越的に（経験によらず）推定する思考操作のことである。つまり、個々の現象から一般的構造を推論することである。

Ⅲ 研究の遡源的・循環的プロセス

(1) オープンシステムにおける現象の説明

自然科学の研究領域も社会科学の研究領域も閉じたシステムではない。そこではある出来事を引き起こす作用因（他の出来事やメカニズム）は他の作用因によってその影響力を相殺されたり、違う方向で発現させたりすることが生じる。実験という方法は、これらの理論で原因と仮定された作用因以外の作用因を排除する作業にほかならない。

言い換えると、因果的メカニズムの作動（実在のレベル）と、それらによって決定される諸出来事の発生（出来事のレベル）は存在論的にみて別のレベルの問題である。またそれらのレベルはその出来事の観察のレベル（経験のレベル）とも異なっている。実験というのは実在のレベルで、特定の現実の出来事を生み出すある因果メカニズムを突き止めるために、そのメカニズムの作用を相殺したり交互作用する他のメカニズムから切り離して、特定の現実の出来事を生み出す状態を作り出す、すなわち開放系を閉鎖系に変える作業である。

社会科学ではほとんどの現象について実験が採用できない。その根本的理由は、社会科学の研究対象が実在のレベルでは自存的であるが、現実のレベルや経験のレベルでは意存的であるということだ。こうした「社会生活の概念依存性 (concept-dependency)」によって、社会的対象と研究活動の間に相互反映性 (reflexivity) がみられ、実験の実行はそれ自体因果的メカニズムの作動を左右するからである (予測の自己成就あるいは予測の自殺など)。実験の欠如を補う方法として、G.Steinmetzは理論的変換 (theoretical transformation) を挙げている。これは、社会的実践の中でよく知られている前提や、当の行為者たちの社会的メカニズムの捉え方 (前科学的理論) を出発点として、これらを篩にかけ、精緻化し、不的確なものを除去する作業を経験的検証にかけながら実行することだとされる。そして、最終的な原因の確定は不可能であるから行わないという。

社会科学にはもう一つの特徴がある。それは、自存的メカニズムは実在するものの、そのメカニズムによって作動する社会的対象の現象的な現れ方は時間的・空間的に限定的で普遍的でないということだ。

こうした、開放的で歴史的なシステムにおける現象を説明するための研究手順とした、R.BhaskarはDREIモデルを、G.SteinmetzはRDREモデルを、そしてB.DanermarkらはDRARCCモデルを提唱している。DREIモデルとは、次の五つの段階からなる研究手順を指している。

- ① Description : 法則的な行動の記述
- ② Retroduction : 行動のあり得る諸原因の遡源的推定
- ③ Exploiting analogy : その行動についての可能な諸説明に、既知の諸現象との類似点を利用する。
- ④ Elaboration & Elimination : 代替的な諸説明を精緻化し、不適切なものを消去する
- ⑤ Issuing : 経験的に統制された同定作業によって、作動している因果メカニズムがなんであるのかを結論づける

RDREモデルとは、次の四つの段階からなる研究手順である。

- ① Resolving : 複雑な出来事をその成分に分解する
- ② Description : 行動を法則的に記述する
- ③ Retroduction : 行動のありうる諸原因を先行要因の中から突き止める
- ④ Elaboration & Elimination : 代替的な諸説明を精緻化し、不適格なものを除外する

DRARCCモデルとは次の六つの段階からなる研究手順である。

① Description : 説明的社会科学の分析は通常、具体的なものから始める。まず、研究しようとしている複雑で複合的な出来事や状況を記述する。ここでは日常の諸概念を用いて記述する。この記述の主要部分は出来事に関わっている人々の解釈と、彼らがその時の状況を叙述する仕方からなっている。ほとんどの出来事は量的方法だけでなく質的方法で記述されるべきである。

② Analytical Resolution : この段階では、様々な構成要素、側面あるいは次元を区別して複雑で複合的な出来事を分解する。なにごとにもその様々な構成要素を全体として研究することは不可能であるので、特定の要素に限定して研究を進める。

③ Abduction/Theoretical redescription : この段階では、様々な構成要素/側面を構造と関係についての理論や仮説的概念枠組の視点から解釈し、記述し直す。この段階では、アブダクションと再記述を行う。研究対象の元々の観念を新しい観念の文脈の中に置くことで発展させる。ここでは理論的解釈や説明を呈示し、比較し、可能であれば互いに統合させる。

④ Retroduction : この段階では、様々な方法的戦略が採用される。その目的は焦点を当てた様々な構成要素/側面のなかのそれぞれについて、次のような問いに対する答えを見つけることである。構造や関係を構成しているものは何か？構造や関係はどのようにして可能か？構造や関係がそれらであるために必要な特性は何か？

⑤ Comparison between different theories and abstraction : この段階ではアブダクションとリトロダクションで叙述したメカニズムと構造の相対的な説明力を評価し、精緻化する。

⑥ Concretization & Contextualization : 具体化では様々な構造やメカニズムが具体的状況の中でどのように自らを発現させるかを検討することが含まれる。ここでは、特定の条件下で様々なレベルで一つのメカニズムが他のメカニズムと相互作用する仕方を研究することが重要である。この研究の目的は二つある。一

つは特定の文脈の中で視点に入ってくるメカニズムの意味を解釈することである。今ひとつは具体的出来事やプロセスの説明に役立つことである。これらの説明の中では、より構造的な条件と、偶然の状況とを区別することが重要である。この研究プロセスは応用研究で特に重要である。

(2) 構造による説明

A.Sayer (1984) は批判的实在論の研究は、

- ① 抽象（とりわけ社会構造の抽象）
- ② 一般化
- ③ 因果関係の分析

の三つの段階からなるという。社会の研究とは社会的世界の分化を研究することである。そのためには、研究対象となっている社会現象を個別化し、その属性と関係性を特づけなければならない。そこでまず、個別の諸現象に影響を与える要因に焦点を当てるために、あまり重要でなく偶然的な影響を与えるにすぎない要因を研究から排除しなければならない。そのための作業が抽象であり、当該の社会現象を生み出している本質的なメカニズムである社会構造の抽象がまずなされなければならない。

批判的实在論では、抽象とは具体的対象がもつ多くの側面から、ある一つの側面を切り離すことである。だから、抽象対具体の対比は思考対实在の対比に対応したものではない。具体的対象（現象や出来事）というのは多様な要素や諸力の結合によって構成されているが、その中の一つの要素を切り離すことが抽象であり、具体的諸対象に共通してみられ、それらを産み出していると見られる要素（力）が構造であるというのだ。

従来、社会学では次の四つの構造のとらえ方が存在するという。

- ① 時間の経過の中で安定している諸行動に見られるパターン
- ② 社会的事実の働きを支配する法則的な規則性
- ③ 社会的諸位置間に存在する人間関係のシステム
- ④ 行動を構造化する（組み立てる）集合的なルールや資源

第一の捉え方は、G.C.Homans (1975) や R.Collins (1981) の方法論的個人主義の立場に立つ微視社会学者の見解である。R.Collinsは次のように言っている。

「社会的パターン、制度、そして組織といったものは個々人の行動から抽象された概念であり、時空間内の様々な微視的行動の分布状態を要約したものにすぎない。・・・もしそれらが一つの連続的実体を指し示すように見えるなら、それはそれらを作り上げている諸個人が何度となく微視的な行動を繰り返しているからである。・・・社会構造とは、微視的翻訳の立場からすると、特定の場所で特定のものをを用いたり、特定の他の人々と繰り返し同じ象徴的表現を用いてコミュニケーションするといった、人々の反復的行動を指している。」(Collins,1971:989-995)

このように微視的翻訳の立場に立つと、社会構造は反復的な微視的相互行為のパターンとして示され、国家や階級といったものは実在せず、微視的状况の中で行為する個々人の集合が存在するだけだとされる。たとえば、国家というものは法廷で裁判官が繰り返し判決を言い渡したり、警察官が犯罪者を繰り返し逮捕したり、軍隊が繰り返し戦闘訓練をしたり、議会が繰り返し開会されるなどによって存在しているかのように見えるだけだとされる。

第二の捉え方は、E.Durkheimに起源をもち、P.Blau (1977)、B.Mayhew (1980)、J.H.Turner (1984)らの構造的社会学者の見解である。

「社会構造は、狭義には人々の間の相互関係を反映し、またそれに影響を及ぼす様々な社会的地位への母集団の配分を指すものと概念化される。社会構造を語ることは人間たちの分化を語ることに他ならない。というのも、社会構造は人々が役割関係や社会的結合の中でなす社会的区分に根ざしているからだ。これらの社会的区別は様々な役割や地位の違いとして表現され、ひるがえって、その後の社会的結合に影響を及ぼす。しかし全体社会やコミュニティの

構造を考えると、人々は当然一つではなく同時にいくつかの社会的地位を占めている。たとえば、人々は職業をもち、宗教団体に属し、コミュニティの中で生活し、会社などで働き、多少なりとも学歴があり、なんらかの社会経済的地位を占めている。だから、それぞれのタイプの地位に対して、母集団はそれぞれ配分されている。

したがって、社会の巨視的構造は人々の間に配分され、人々の社会関係に影響を及ぼす、多次元的な社会的諸位置からなる空間として定義される。こうした抽象的な把握の仕方をすれば、社会の巨視的構造は、個々人の役割関係や微視的構造と等質的なものとなる。いずれの場合も、社会的地位や関係のフォーマルな特性は、それらの実質的な内容、とくに、文化的、心理的な思考から抽象される。・・・

微視的構造は小集団内の人々の間の結合のソシオグラムで表されるような、個々人に固定された対人関係のネットワークである」(1977:28)

ここではある社会的事実の量的変動が別の社会的事実の量的変動と関係づけられ、その随伴現象と解釈される。つまり、社会的事実(や集団特性)は相互に法則的規則性というパターンによって連関し、それらが合わさって社会構造を形作っているということになる。この概念化を用いる立場は、実証主義的で全体論的なアプローチをとり量的な方法を用いる。

第四の捉え方はGiddens(1981)にみられ、社会構造はルールと資源として捉えられている。

「構造はルールと資源として分析することができる。社会システムの再生産された諸特性間に変換と媒介が見いだせる限り、構造は『集合』として扱うことができる。・・・構造とシステムは区別される。社会システムは特定の時空間を超えて再生産される。だから社会システムは状況づけられた実践によって構成されている。他方、構造は社会システムの生産に再帰的に巻き込まれる瞬間にのみ時空間内に存在する。構造は仮想的にのみ実在するにすぎないのだ。」(A.Giddens,1981:26)

ギデンスが社会システムと呼んだ関係性のパターンは第三の構造の捉え方では社会構造であるが、ギデンスはこれらの関係性と結びつくルールと資源が社会構造を構成していると考えている。つまりルールと資源が関係性の体系的パターンを「構造化する」(いいかえると生成し、再生産する)と考えているのだ。構造すなわちルールと資源は、社会システムを再生産する構造化特性のことである。第三の構造の捉え方では、構造とは実際の社会編成、すなわち所得分布であったり分業であったりするが、ギデンスにとって構造とは実際の社会編成の背後に存在する編成原理、すなわちルールと資源のことである。批判的实在論では、構造を第三の意味で用いるが、そのとらえ方は「構造とは要素間の諸関係である」という関係的構造説に他ならず、むしろ全体(閉じた諸関係の全体としての組織やコミュニティを指している)が実体として存在した場合、それを構成する諸個人だけではもちえぬ人間の行動に対する影響力が発生することを把握することが重要であるとして、D.Elder-Vass(2007)は社会構造を「社会的全体の因果力」としてとらえようとしている。要するに、批判的实在論という構造とは組織やコミュニティなどの「社会的行動(出来事)を産み出す、因果力を持った社会諸関係からなる全体」のことである。ここで、組織とかコミュニティなどはフォーマルな社会構造であり、階級構造とか中核・周辺構造はインフォーマルな社会構造である。D.Elder-Vass(2007)はフォーマルな構造を重視しているが、C.Prell et al(2010)はインフォーマルな構造の方が基底力が大きいことを実証している。

批判的实在論は超歴史的、超空間的な一般構造といったものを措定せずに、特定の歴史的、地域的な文脈の中で一般的な社会構造をそれらの構造を前提として行動するその時代の人々が産み出す諸出来事から、アブダクションの論法を用いて想定しようとする。この意味で、構造とはある時代のある人々の行動の前提となり、それらを産み出すそれまでの人々が行ってきたことにより形成され蓄積されている関係性の総体のことだといえる。こうした構造は、その当時の人々の集合的な創発的行為により変容され、変革され、新しい構造を生み出していくと考えられているのだ。

(3) 言説的な社会構造と無意識的な社会構造

世界を自存的な実在と意存的な実在とに区別する批判的实在論の立場を、I.Reed(2008)は社会的世界が

行為主体によって作り出されることを認める限り妥当しないと批判する。社会学的説明を構築する作業には、社会の中で流通している意味（人々が自らの経験を概念化して抱いている意味）と、一つの意味構造としての社会学理論との両者に依存していて、この両者は共に批判的実在論者が構造と呼ぶものには還元しえず、社会学的説明は、社会の中で流通している意味と社会学理論との交叉のなかで出現するものである。つまり、自存的な構造といったものが存在しえないのであるから、人々の誤った社会的知識に対して、アブダクションによって構造についての正しい知識に置き換えるといった説明はそもそも存在しようがない。可能な作業は人々の抱えている世界の見方を多層的に解釈することだけとReedは言っているのだ。この多層的解釈とは、①個々の行為者の主観的意識を解釈すること、②行為者の主観的意識が埋め込まれている超個人的な意味構造としての文化を解釈すること、③それ自体が歴史的に特殊な意味理論をもつ社会構造を解釈することの三つの作業からなると主張している。

しかし、①の行為者の主観的意味の解釈はなるほど訳の分からない言葉を皆が知っている言葉に翻訳するという意味での解釈に当てはまるであろうが、②の超個人的な意味構造としての文化や③の歴史的に特殊な意味理論をもつ社会構造は行為者の主観的意味の中には実際にはほとんど登場することではなく、③の社会構造に到っては行為者たちが意識しない潜在的領域であるか、その外在性と拘束性の故に意識してもどうにもならない社会構造である。社会的世界は人々が言説過程のなかで作り上げていくシンボリックインターアクションの意味世界の他に、相互行為者の外部に第三者の意図が存在した途端に発現するemergentな拘束的世界とがある。前者が意存的であって、後者が自存的であることは明白である。われわれは構築主義者が考えるほど無前提的で非拘束的世界に生きているのではない。先行者たちが我々とは異なる価値観をもって生きてきた、そして同時代者たちが別の意図をもって生きているこの社会的世界に生きる限り、そのことは避けられない。しかし、この社会的世界が我々の微視的なシンボリックインターアクションの中で少しずつ変容していくこともまた正しいと言える。

アブダクションにより自存的世界の構造を把握し、その比較的安定的で永続的な影響力のもので我々の社会的構築の営みがどのように展開するのかを解説することが、批判的実在論の説明に他ならないと言えよう。人々の主観的意味の文脈に位置づけられていた個々の出来事をその文脈から切り離し、それを社会構造の理論という別の意味の文脈の中に置いて解説するアブダクションというこの作業を解釈と呼ぶべきだという主張であるならばそれはあながち否定されるものでもないかも知れない。ただこの解釈は三人称の解釈であって、一人称や二人称やの解釈ではないから、真の意味では解釈ではあり得ない。

参考文献

- Archer,M.,R.Bhaskar, A.Collier,T.Lawson, & A.Norrie (ed) , 1998, *Critical Realism: Essential Readings*, London: Routledge.
- Bhaskar,R., 1975, *A Realist Theory of Science*. Leeds: Leeds Books. 「科学と実在論」(式部信 訳) 法政大学出版局2009.
- 1979, *The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Science*, Routledge, London. 「自然主義の可能性」(式部信訳) 晃洋書房2006
- 1986, *Scientific Realism and Human Emancipation*, London: Routledge.
- 2002, *Reflections on Meta-Reality: Transcendence, Emancipation and Everyday Life*, London:Sage.
- 2011, *Reclaiming Reality: A Critical Introduction to Contemporary Philosophy*, London: Routledge.
- Chiasson,P., 2005, "Abduction as an Aspect of Retrodution", *Semiotica*,153 (1/4) :223-242.
- Collins R., 1989, "Sociology: Proscience or Antiscience?", *ASR*,54:124-139.
- Danermark,B., M.Ekstrom, L.Jakobson, and J.Ch.Karlsson, 2002, *Explaining Society: Critical realism in the social sciences*. Routledge, London
- Downard,P., & A.Mearman, 2007, "Retrodution as mixed-methods triangulation in economic research: reorientiog economics into social science", *Cambridge Journal of Economics*,31:77-99.
- Eco,U., & T.A.Sebeok,1983, *The Sign of Three: Dupin, Holmes, Peirce*, Indianapolis: Indiana University Press.

- Elder-Vass,D., 2007a,"For Emergence: Refining Archer's Account of Social Structure", *Journal for the Theory of Social Behaviour*,37 (1) :24-44
- ,2007b,"Social Structure and Social Relations", *Journal for the Theory of Social Behaviour*,37 (4) 463-477
- 2010, *The Causal Power of Social Structures*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Fischer,H.R., 2001, "Abuductive Reasoning as a Way of Worldmaking", *Foundations of Science*, 6:361-383.
- Hedstrom,P., 2005, *Dissecting the Social: On the Principles of Analytical Sociology*, Cambridge University Press.
- 伊賀光屋, 2012, 「社会科における説明的論証—立証と説明—」新潟大学教育学部研究紀要 4 (2) : 169-186.
- 池谷祐二, 2005, 「なぜ大脳は常に活動しているのか」実験医学2005年5月号.
- Maturana,H.R., & F.J.Varela, 1980, *Autopoiesis and Cognition: The realization of the living*, Dordrecht: D.Reidel Publishing, 河本英夫訳「オートポイエーシス」国文社
- Maturana,H.R.,1978, "Biology of Language: The Epistemology of Reality", G.A.Miller and E.Lenneberg (eds.), *Psychology and Biology of Language and Thought: Essays in Honor of Eric Lenneberg*, New Yoek: Academic Press, 27-63.
- ,1988, "Reality: The Search for Objectivity or the Quest for a Compelling Argument" *The Irish Journal of Psychology*, 9(1) :25-82.
- Minnamerer,G., 2004, "Peirce-Suit of Truth - Why inference to the best explanation and abuduction ought not to beconfused",*Erkenntnis*,60:75-105.
- Paavola,S., 2006, "Hansonian and Harmanian Abuduction as Models of Discovery", *International Studies in the Philosophy of Science*,20(1) :93-108.)
- Peirce,C.S., 1878, "Deduction,Induction, and Hypothesis", in N.Houser & C.Kloesel(ed.) *The Essential Peirce Vol.1 (1867-1893)*,186-199.
- 1908, "A Neglected Argument for the Reality of God", in the Peirce Edition Project (ed.) *The Essential Peirce Vol.2 (1893-1913)*,434-450. 遠藤弘訳「パース著作集 形而上学」勁草書房
- Porpora,D., "Four Concepts of Social Structure", *Journal for the Theory of Social Behaviour*,19(2):195-211
- Prell,C.,M.Reed,L.Raein,& K.Hubacek, 2010, "Competing Structure, Competing Views: The Role of Formal and Informal Social Structurers in Shaping Stakeholder Perceptions", *Ecology and Society*15(4):34-51
- Reed,I., 2008, "Justifying Sociological Knowledge: From Realism to Interpretation", *Sociological Theory*, 26(2):101-129.
- Sayer,A., 1984, *Method in Social Science: A Realist Approach*, London: Routledge
- 1997, "2Critical REalism and the Limits to Critical Social Science",*Journal of the Theory of Social Behaviour*,27 (4) 473-488.
- Sokal,A.D.,1996, "Tramsgressing the Boundaries: Towards a Transformative Hermeneutics of Quantum Gravity", *Social Text (Spring-Summer)* :217-252.
- Staat,W.,1993, "On Abuduction,Deduction,Induction and the Categories", *Transactions of the Charles S.Peirce Society*,29 (2) 225-237.
- Steinmetz G., 2004, "Critical Realism and Historical Sociology. A review Article", *Comparative Studies in Society and History*,40(1):170-86.
- von Glaserfeld,E.,1995, *Radical Constructivism: A Way of Knowing and Learning*, London: Falmer Press. 橋本渉訳「ラディカル構成主義」NTT出版
- 2001, "The Radical Constructivist View of Science", *Foundations of Science*,6 (1-3):31-43.
- Wuisman,J.J.J.M., 2005, "The Logic of Scientific Discovery in Critical Realist Social Scientific Research", *Journal of Critical Realism*,4(2):366-394.